

三省堂

# ことば の学び

別冊 | No.04



## 日常に生きる書写の学び

——自作プリントをとおして

東京都板橋区立第五中学校  
秋庭 加恵手



### 一 はじめに

自作プリントと自己評価表を使った授業をやりだしてから、書写の時間にやりがいを感じるようになった。書写に関する生徒の能力や意識の変化が毎時間わかるようになったからである。

この方法の大きな特徴として、一時間の中で毛筆と硬筆の両方の取り組みを行うこと、その両方に自作のプリント学習材を使用すること、最後に自己評価を通じて振り返りを行うこと、の三点があげられる。

一時間の目標をはっきりさせて、的を絞った学習活動を行うことができるように、プリントの内容や構成を考える。時間が取れる場合にはプリントの枚数を多くして練習時間を増やすこともできるし、時間のない場合はプリントの枚数を減らして目標達成のために最低限必要な部分のみを練習する形にすることができる。

生徒は、毛筆 硬筆 自己評価といった流れの学習形態にはすぐに慣れた。

以下では、具体的な例に沿いながら、その流れと内容を示してみたい。

## 二 授業の流れ

### 1 目標の確認

本時の目標を確認する。次にその目標達成のために使う文字を教科書で確認する。同時にその文字のどこに本時の目標とする部分が含まれているのかをみんなで考え、おさえておく。

### 2 毛筆用プリント学習材での練習

まず「試し書き」を行い、目標を達成するためには自分の書いた文字のどこに課題があるのかをつかむ。次に複数枚としてあるプリント学習材の中から自分の課題にあったところを選び、練習をする。最後に「まとめ書き」を行って練習の成果を確認する。

### 3 硬筆用プリント学習材での練習

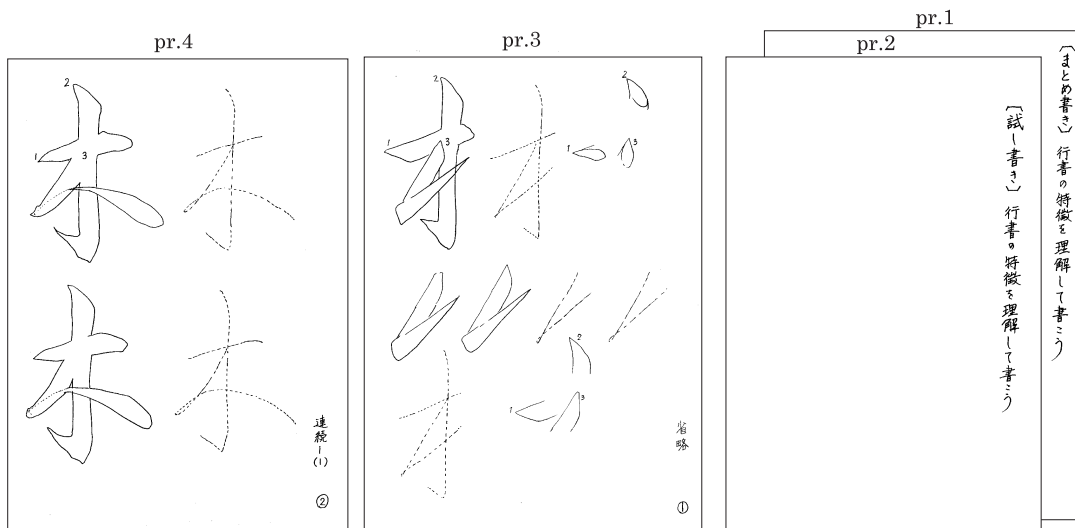
毛筆で練習したものと同じ文字に加え、さらに課題と同じ要素を含む他の文字を硬筆で練習し、日常生活の中で書く文字にも本時の練習の成果を生かせるようにする。

### 4 自己評価をとおしての振り返り

本時の取り組みと課題についての達成状況を振り返り、今後につなげる。

## 三 毛筆用プリント学習材をつくる ときの留意点

この学習材は全部で十枚前後のプリント（B4版中質紙）を一人分とし、上端二、三か所をホチキス止めにしたもの。  
一枚めを「まとめ書き」、二枚めを「試し書き」にし、三枚め以降を練習用紙とする。生徒が使用する順番は、試し書き 三枚め以降の練習用紙 まとめ書き、となる。生徒は試し書きでつかんだ自分の課題にあう練習用紙を選んで書くので、どこから練習を始めてもかまわない。下敷きをはさまずに進められる。「まとめ書き」と「試し書き」には、目標をいつも意識できるように右上に本時の目標を短く書いておく。三枚め以降には練習中の生徒のめやすとなるよう、右下端にそのページの練習内容を短いことばで書き、ページ数を記しておく。  
筆使いの段階に応じて練習ができるように、練習用紙には籠書き、骨書き、始筆・終筆の部分書き等を入れる。  
予想される生徒の課題達成状況や、授業時間によって練習プリントの枚数や内容を変え、あらかじめ配布しておく。



#### 四 学習の実際

一年生の行書の学習を例にしてみる。

目標を「点画の丸みや連続、省略を理解して書こう」とし、「林道」という文字を使って学習した。「林道」は実際に行書で書くと「丸み」「連続」「省略」のほかに「方向や形の変化」という行書の特徴をすべて含んだ文字であり、教科書でも復習する場で扱われていた。しかし、それまでの学習の流れと生徒の学習達成状況から考えて行書の特徴を四つ全部学習するのはやめて、この時点では三つにした。生徒は丸みと連続、省略については他の文字を使って学習してきている。

まず初めに本時の目標を確認した。黒板の定位置に目標を書き、点画の丸み、連続、省略が「林道」という文字のどの部分に使われているのかを確認する。

それぞれの筆使いの特徴について、黒板による説明を聞いたあと、各自がプリントの二枚め「試し書き」の用紙(print)を使って書いてみる。その時点で自分の課題だと判断したところに印を付ける。

プリントの中から自分の課題にあった

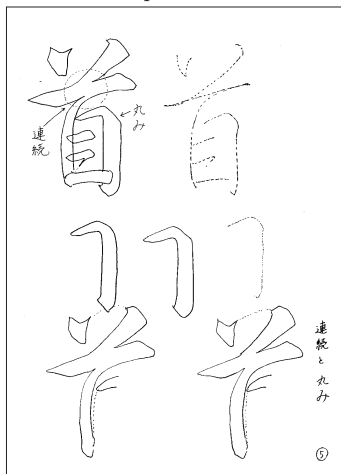
ページを探し、そこから練習を始める。初めから順番に練習していく必要はない。最後にプリントの一枚めにある「まとめ書き」(pr.1)を行う。

試し書きで「丸み」に課題があると感じた生徒は「道」という字の六画めの部分から練習を始めた。楷書と同じように筆を途中で入れ直してしまうので、何度も書きながら行書の筆使いを覚えこませるようにして練習し、用紙の隙間にも書き込んでいた。(pr.7)

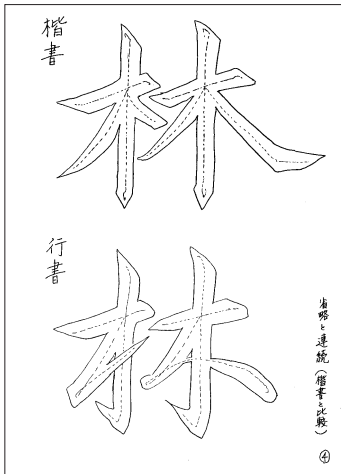
別の生徒は「林」の七画めと八画めの連続から練習を始め、楷書の払いと次の画の始筆がつながった部分を「連続」と呼んでいるのだということを確認して、力を抜くところと入れるところのタイミングを何度も練習していた。(pr.4・5)

毎回プリントを授業後に集める。評価の際にはその生徒の試し書きとまとめ書きを比較しながら見ることができ、目標に対して生徒が達成した部分と、引き続き課題として残している点を確認することができる。また生徒が課題として印を付けたところについて、どの練習用紙を選んでどのように練習したのか、その経過をたどってアドバイスを加えていく。

pr.7



pr.6



pr.5



## 五 硬筆の力をつける

各時間の目標に掲げられている内容は、生徒たちにとって毛筆・硬筆の両方の場面に共通して必要なものである。

毛筆で練習した際の注意事項や筆使いが日常生活の中でも生かされるようになるには、より身近な硬筆での練習を同時に経験しておくことが大切になる。そこ

目標(点画のれみや連続、省略を理解し書けること)  
月 日  
硬筆でも書けるよう  
行書で  
林 道  
林 道  
相 校前  
相 校前  
例) 秋大月 月  
校前相  
上の文字以外にも自分で探した字を行書で書いてみる。

○ 次の漢字も行書の特徴に注意して書いてみよう。  
 えてくるころから書いてみよう。途中までで終わってもいい。  
 やかん  
 ○ 自己評価  
 次行書の特徴を理解し書くことができたか。  
 (毛筆)  
 ○ れみ A・B・C ○ れみ A・B・C  
 ○ 連続 A・B・C ○ 連続 A・B・C  
 ○ 省略 A・B・C ○ 省略 A・B・C  
 感想

で必ず毛筆のあとに同じ目標の達成を目指すして作成した硬筆用プリント学習材を使っている。

学習時間はあまり多くを取れないので、B5版の上質紙又は画用紙一枚を使い、十分程度で終わる内容にしている。

その時間に毛筆での学習で扱った文字は、必ず硬筆でも扱う。目標を意識し、書いた文字を自分の目でしっかり確認できるようにするために、文字の大きさはふだんよりも少し大きめになるようにする(2=角以上のマスをつくっている)。

また、本時の目標を達成するために、毛筆での練習に使わなかった文字もこのプリント学習材で扱う。なるべく日常生活の中で多く使う文字を選び、本時の目標にそって練習できるようにする。

指定されている文字を見ながら書くという形だけではない。時には自分で教科書の巻末に載っている漢字の一覧表からその時間に学習した内容と同じ部分を含む漢字を見つけて書き出したり、楷書で書いてあるものを行書に直して書いたりといった応用的な課題も取り入れ、日常生活につながるようにしている。

硬筆用プリントの後半(左端または裏

側)に、毛筆を含めた全体の自己評価を行うための項目を簡潔書きにしておく。五分くらいで終わるような簡潔なものにしている。生徒はその一つひとつに対して三段階程度で自己評価をし、目標に対してどの部分をどの程度達成し、どの部分に課題が残ったかを振り返る。教員はその自己評価の内容を見て過小評価をしていれば達成できている点を教え、過大評価をしている部分があればプリント上や次回以降の授業で指導していく。

## 六 おわりに

試し書きとまとめ書きの両方を見ると、目標に対する一人ひとりの成果をきちんとつかむことができる。次に目の前の生徒にどのような力をつけていきたいのか、自分自身が見通しを立てることもできる。漫然と文字を書く時間ではなく、日常生活に役立つ知識と技能を身に付ける時間として、これからも書写の時間を充実させるべく努力をしていきたい。

(あきは かえで) 東京都板橋区立第五中学校  
 校教諭 生徒の豊かな文字感覚と、日常生活に生かす書写力の育成を目指している。